

『良い牧者、キリスト』

ヨハネ福音書 10:14-16

朝岡 勝師

深い感謝と喜びを感じながら、この朝、この場に立たせていただいています。協会 創立 68 周年、まことにおめでとうございます。私にとっても、言葉に言い尽くせないほどに懐かしく、またいつでも祈りのうちにある、愛してやまない土浦めぐみ教会の皆さまとともに主を見上げ、主を礼拝できます恵みを心から感謝します。教会の暦では今日から受難週に入りました。主イエス・キリストの十字架に向かう歩みを思いつつ、その歩みに連なる私たちでありたいと願います。ウクライナの情勢も心痛めつつ祈っています。主の平和と正義が速やかに現れるよう祈りましょう。愛する皆さん 一人一人の上に、主の祝福が豊かにありますように祈ります。

① わたしは良い牧者です

この朝、ヨハネ福音書 10 章の御言葉が開かれています。10 章全体が一つのことを繰り返し語っています。まずは 11 節。「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」。そして今日の 14 節、15 節。「わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っており、わたしのものは、わたしを知っています。ちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じです。また、わたしは羊たちのために自分のいのちを捨てます」。この後も、場面は変化しますが同じようなメッセージが繰り返し語られていきますが、ここで教えられていることは大きく四つのことです。第一に主イエスご自身が羊飼いであり、私たちはその羊であるということ、第二に、羊飼いは自分の羊を知り、羊もまた自分の羊飼いを知っているということ、第三に、この羊飼いと羊の関係は、父なる神と御子イエス・キリストの関係と同じであるということ、そして第四に良い羊飼いなる主イエスは、羊である私たちのためにいのちを捨ててくださるということです。

聖書の中にはこのような羊飼いと羊のイメージが多く登場します。何と言っても代表的なのは詩篇 23 篇でしょう。「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われます」。このように聖書では主が羊飼いで、私たちはその羊だというイメージが繰り返されます。しかもこの羊飼いは自分の羊を知っていて、その名前を呼ぶと言われます。3 節。「牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します」。聖書においては「名前を呼ぶ」というのは特別な行為です。名前を呼ばれるというのは私たちが神の御前に個別な存在として覚えられ特定されることですが、それは神の私たちへの愛を表すものです。12 節、13 節にはこうあります。「牧者でない雇い人は、羊たちが自分のものではないので、狼が来るのを見る

と、置き去りにして逃げてしまいます。それで、狼は羊たちを奪ったり散らしたりします。彼は雇い人で、羊たちのことを心にかけていないからです」。とても対照的な姿ですが、良い牧者とそうでない者との違い、それは「羊たちのことを心に欠けているか否か」ということです。名を呼ぶことも、羊たちを知っていることも、それは羊である私たちが愛する良い牧者なるキリストの愛なのです。愛は個別的であり、2 相手を特定する行為です。主イエスは私たちを知っていてくださる。今私が置かれている状況も、抱えている問題も、背負っている重荷も、悩み苦しんでいる心も、この羊飼いは知っていてくださる。どんなに多くの困難の中に取り囲まれていても、埋もれてしまうような所でも、この羊飼いはそこから名前を呼んで私たちを連れ出してくくださる。そして先頭に立って私たちを導き、私たちとともに歩んでくださるのです。

それにしてもここで主イエスが語られる「良い牧者」の姿は驚くべきものです。なぜなら「わたしは羊たちのために自分のいのちを捨てます」と言われるのですから。普通、羊飼いが羊を養うのは、羊を育てて毛を刈り、あるいは食肉とし、羊皮紙として使うなどのためにです。つまり羊のいのちを使って自分を生かすのです。ところがこの羊飼いはまったく正反対のことをする。羊のいのちのために自分のいのちを捨てるというのです。ここにあり得ないような愛がある。受難週の朝、このキリストのお姿を心に刻みたいと思います。

②聞くこと、従うこと

ではこの羊飼いに養われる羊の姿はどのようなものでしょうか。それは羊飼いの声を聞き分ける姿、そして羊飼いの後についていく姿です。これも 3 節から 5 節そして 27 節で繰り返されています。「門番は牧者のために門を開き、羊たちはその声を聞き分けます。牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。しかし、他の人には決してついて行かず、逃げて行きます。ほかの人たちの声は知らないからです」。また 27 節。「わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます」。羊飼いが御自身の羊を知ってその名を呼ぶのに対して、羊もまた自分の羊飼いを知り、羊飼いの後についていく。偽の羊飼いでなくまことの羊飼いを知りついていく。ではどうやって羊は自分の羊飼いを識別するのか。そこで大事なことは羊たちが自分の羊飼いの「その声を聞き分ける」と言われる点です。そして聞き分けたなら、その声について行くと言われる。「ついていく」というのは「従う」ということです。主イエス・キリストの御声を聞いたなら、そしてそれがまことの羊飼いの声だと聞き分けたなら、そこに従うと言うことが起こる。「聞くこと」と「従うこと」。それは一つの繋がりのことです。聞いても従いませんというのでなく、聞いてから従うかどうか考えますというのでなく、従える言葉だけを聞きますというのでない。「聞いて従うこと」というひと繋がりの態度。それが信

仰の姿なのです。

しかし、そのためには羊飼いの声が聞こえなければなりません。教会の毎主日の説教壇から説教が語られます。まことの羊飼いなる主がお立てになった、それぞれの群れの牧者、説教者を通して、主が語られる。その御声を私たちは聞くのです。私たちはそれを人間の声でかき消してはなりません。そしてその声を聞き分ける。この声は本物か偽りかを聞き分ける。偽預言者の時代、偽キリストの時代、フェイクなものが溢れる時代に、本当の羊飼いの声を聞き分ける。そのためには私たちがいつも御言葉に親しみ続けることが大切です。誰か任せの信仰でなく、自分の足で立ち、自分の頭で考え、自分の霊で識別する、そのような成熟した信仰へと進んで行く。コツコツと地道に御言葉を学び、御言葉の教えを学ぶ。そうして私たちは主の御声を聞き分ける 3 者とされていくのです。

私は若い時に、この土浦めぐみ教会でそのような信仰を教られ、養われました。この会堂が建つ前、父が病に倒れた時、まだ何も分からない 15、6 歳の時でしたが、このまま教会はどうなってしまうのだろうかと思いました。しかし毎週毎週、礼拝が献げられ、御言葉が語られる。その中で「御言葉が語られさえすれば教会は何とか立ち行くものなのだ」ということ経験しました。そして父の召された二年後にこの会堂が建ったとき、主が生きておられることを経験しました。また私はこの 3 月で 21 年半奉仕した徳丸町キリスト教会を辞任しました。教会 57 年の歴史で私が 11 代目の牧師でした。今回 12 代目の牧師に引き継いだところです。私の赴任前には無牧の期間がありました。赴任した当初、教会は疲れ切っていました。そんな中でどのように奉仕を始めようかと祈りましたが、不安や心配はありませんでした。自分のなすべきことが何かはつきり分かっていたからです。それで皆さんに呼びかけました。「とにかく礼拝に集中しましょう」、「御言葉に聞きましょう」と。礼拝で主の御声に聴き続けていたら、必ず教会は元気を取り戻す、自分の務めは御言葉を語ることに。そうして 21 年半過ぎてまいりまして、今、本当に生き活きとしたすばらしい教会が建てあげられています。何も変わったことをしたわけではない。特別なことをしたわけでもない。当たり前のことを当たり前のこととして忠実に誠実に取り組み続けてきた。ひたすら羊飼いの声に聞いて、従って来た。その時に羊飼いなる主が私たちを養い、生かしてきてくださったのです。そういう経験を皆さんもしてきたし、ますますしていただきたいと願います。

③ほかの羊をも

最後に 16 節。「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます。それらも、わたしは導かなければなりません。その羊たちはわたしの声に聞き従います。そして、一つの群れ、一つの牧者となるのです」。ここには羊飼いなる主イエスの、良き羊飼い以上の決意、決断が言い表されています。自分の羊のためにいのちを捨てるだけ

でも十分過ぎるほどに良き羊飼いであるのに、主イエスはさらに、その囲いに属さない羊をも導かなければならないと言われる。それは度の過ぎたことように思えるかも知れない。自分の羊への責任を果たせばそれで十分ということかもしれない。けれどもそこで私たちは思い起こさなければなりません。この羊飼いは一匹の迷い出た羊を捜し出すためには、ほかの九十九匹を野においても出かけていく羊飼いなのです。それを責任放棄と見るかもしれない。度の過ぎた行為と見るかも知れない。囲いの中の羊だけを考えていてくれればいいと思うかも知れない。しかしこの羊飼いはそれだけでは十分でないというのです。そしてその囲いの外の迷い出た羊のためにも、ご自分の命を捨てるほどに愛を注ぎ、そして御自身のよみがえりのいのちの中にもともに勝ち取ってくださるのです。

この度が過ぎるほどの愛によって、実は私たちは見出されたのではないのでしょうか。私たちは誰ひとりとして、もともと囲いの中にいた羊ではないのです。私たちはみな、誰ひとり例外なく、囲いの外をふらふらとさまよっていた羊ではなかったのでしょうか。そんな囲いの外にいた私を捜し出し、見つけ出し、囲いの中への招き入れてくださったこの羊飼いに対して、今度は囲いの中に入ったらもう自分たちだけを世話をしたい、自分たちだけに愛を注いで欲しいと注文するのは筋違いです。この点で教会は神の愛を独占しようとする過ち、神の愛の中に閉じていくような内向きの交わりになる過ちから絶えず自由にされていかなければなりません。伝道する教会になるというのは、私たちがまず囲いの外にいた迷子の羊であったことを忘れないということから始まっていくのです。その時に教会はこの良き牧者なるイエス・キリストの羊たちに 対する度が過ぎるほどの愛を知り、その愛に動かされ、私たちもまたその愛の中で伝道する羊の群れとなっていくことができるのです。

羊のためにいのちを捨ててくださる良き牧者イエス・キリストは、私たち羊の群れを永遠のいのちに生きる者とするために自ら死に打ち勝ってよみがえられた神の小羊です。土浦めぐみ教会がこの主の御声に聞き従いつつ、「ここに救いがある、ここに憩いがある、このいのちがある」と大きく声を挙げて人々を主の御許に招く教会としてますます祝福のうちに進まれますように。